



## 「やさしい家」

まどろみの中で、水を愛で、皆、踊りだす

自邸である木造3階建ての狭小住宅をモチーフに3つの家を制作した。それぞれ、模様替え、リノベーション、再設計という手法を用いた1人、夫婦、子どものいる家族のための家である。

住宅はその人のシェルターやユートピアとなりうるとともに、子どもであることや介護、内外、様々な状況や要因によって、簡単に逃げられない所という性質も帯びてしまう。そういった住宅においてのやりきれなさを軽くすることは、例えば、布を一枚かけたり、部屋の名前ひとつに愉快的な名前を付けることなど、状況を大きく変えなくとも、些細なことからも出来るだろう。そして、誰かの生きづらさを豊かに何とかしようとするとき、空間の在り方は再発見される。

この家々では、家にある、水をこぼすという概念、騒いではいけないといった不和、ベッドで寝なくてはといった常識が無くなったり、それが楽しげに見えたり、してはいけないが肯定できるように映る。それぞれの住宅では、むしろ幸福な逆転すらおきてしまう。そして、個人のアウトサイダーな部分は受け入れられ、この住宅を生きるため、楽しみ尽くすために必要不可欠なものとなる。

自身の抱える受け入れ難い何かによって、自身は他者や世間からの拒絶だけでなく、少しずつ自身によって傷つけられる。『やさしい家』はそういったことが出来るだけ起きないようにと設計を行った。この作品は、3つの家でクライアントとして想定したそれぞれが持つカテゴライズしたパーソナリティそのものについてではなく、個人が多かれ少なかれ皆が持っているいびつで他者や社会とは相容れない部分に対しての提案であり、そういった部分が抑圧されるのではなく、解放され、日常に許されて存在して欲しいと願いながら制作している。

また、1960年代以降のアメリカにおける学生運動および第二波フェミニズム運動におけるスローガンである「The personal is political」（個人的なことは政治的なこと）といったことやその反対を想うこと、他者（人だけでなく建築や様々なもの）と対話していくことについてを考えながら制作した。

新築やリノベーションという設計と言われる行為だけでなく、名づけや模様替えといったいわゆる従来の設計行為から外れた行為までを設計行為（他者や自身からの行為）として示すことによって、設計行為という枠組みを揺らし、再定義していくこと。また、空間についてでのアウトプットではあるが、そもそも設計者という職能を生かす生かさないということ以前に、個人として誰かに他者として人と関わっていくためにやっつけていることはあるだろうといったことについて、示していくことを大切にした。



## 『a chair and not a chair』

performance/choreograph  
Yurika Toyoda  
Sumire Kawamura

1人また2人で椅子に対峙したとき、ある瞬間、それは椅子を超え、個別のものとなる。動きは機能や名称によってどこか規制されている。そこから解放されていくための習作でもある。それは椅子であり、ある時は椅子ではない。

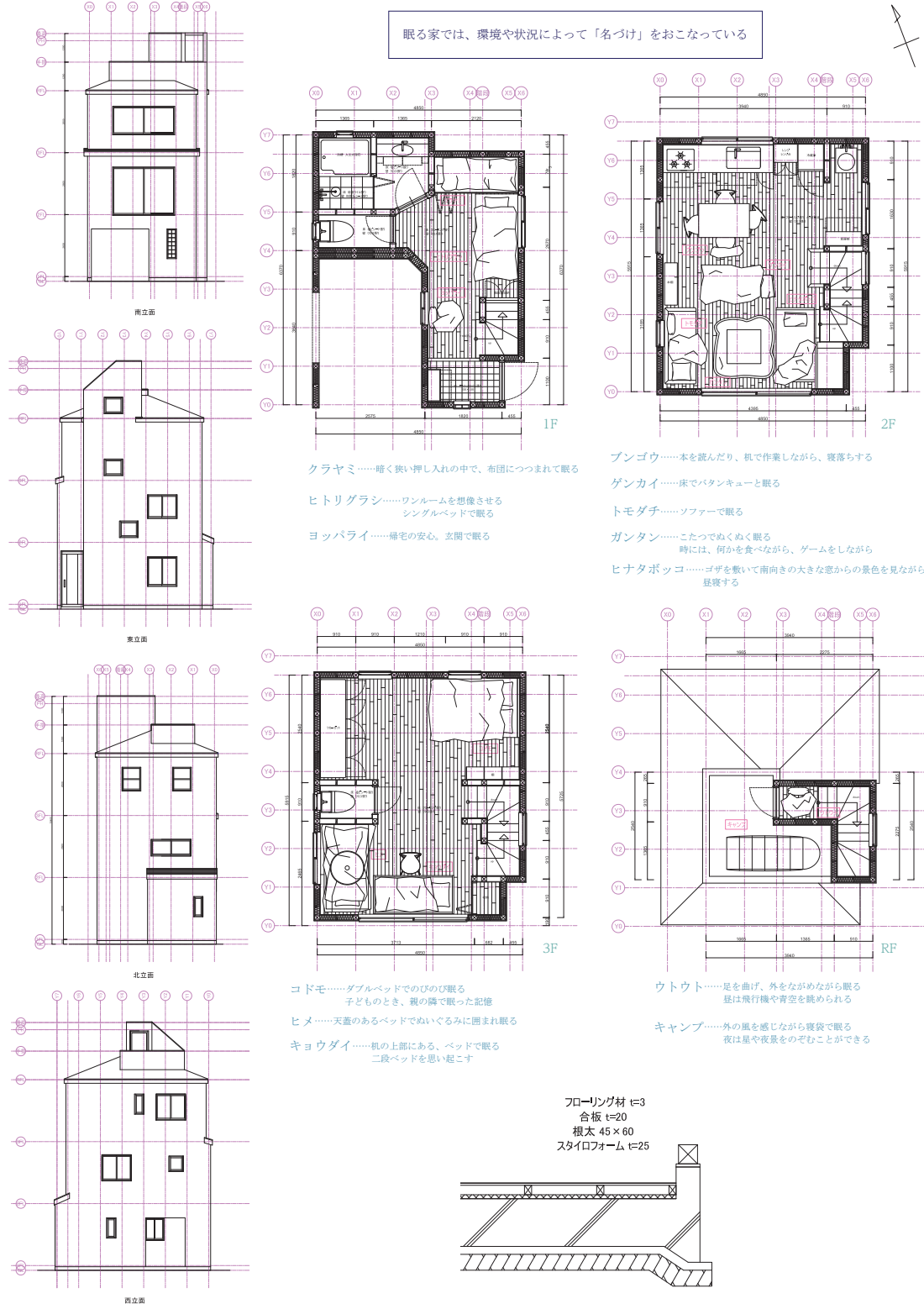


# 01. sleepy HOUSE / 眠い家

type: 模様替え  
1人 (13人)  
自分の中に相容れない他者を抱える人のための家。

色々なところで寝ることができるように、既存の住宅に対し、毛布を置いたり、ベッドを増やすといった提案である。  
寝るところは、空間を含め自身の安心安全の場を表現できる最小の単位と考え、1つの家で13の寝場所を設けた。狭いところ、ベッド、床、様々な寝るところは、全てが快適とは言えないが、想像の世界をも取り込み、最善になっていく。例えば1F玄関には「ヨッパライ」という場所がある。  
自身の中にある他者性とうまく付き合っていくための住宅である。また、様々なところで寝ることができるといったことは、眠ることそのものの悩みへの向き合い方の広がりも想像させる。

この住宅においては、多くの人が、自身の中に他者的な視点を内在させ、自身の行動や選択を常に監視していたり、自身の思い出したくない過去の記憶や自身の持つ好きになれない、相容れない、許せないといった側面を持っているということこそを重要視したうえでアウトプットである。  
何かの雑誌で、ベッドにぬいぐるみを並べ一緒に寝ている女性の部屋の写真を見たことがある。シングルベッドはぬいぐるみで埋まり、寝がえりをうてない広さになっていた。しかし、一緒に映る彼女の様子は楽しそうで、彼女のその他、服装やインテリアも含め、そこに切り取られた世界の中に、彼女は主人公として中心に存在出来ていた。  
クライアントである1人にとって、3階建ての狭小住宅は狭小とはいえず、住む空間には十分すぎる。しかし、多くの他者を内在させる人間にとって、すべての人格に空間を与えるには、狭い空間である。そういった中で、このsleepy HOUSE / 眠い家は、寝るところを空間を含め自身の安心安全の場を表現できる最小の単位と考えたとき、何かを大きく変えるといった提案ではなく、ベッドを増やしたり、配置を変えたりといったいわゆる一般的な「模様替え」といった行為や「名づけ」を行うことで、快適に暮らせたり、相容れない何かとうまくやっていく空間作りができるだろうといった提案である。1つの家で13の寝場所を考えているため、すべてが寝るという空間に適しているものではなく、狭いところ、ベッド、床、様々な寝ところは快適とは言えないが、ここで寝たい、ここにいたいという欲求や、その人の夢や想像の世界をも取り込み、その人格や、その時直面している苦しい状況に対して、最善で安心安全な場として、寝る空間が機能する。色々な所で寝ても良いという常識の裏返しの空間があることは、他者だけでなく、自身からの自身への加害的な感情から守るシェルターとしても機能する。  
また、寝るところを、空間を含め自身の安心安全の場を表現できる最小の単位と考えるといったものは、「The personal is political」(個人的なことは政治的なこと)やまた、その反対「社会的なことが個人的なことでもある」と思うことの在り方も想像させる。例えば、難民キャンプや災害の避難所、仮設住宅において、個人を尊重しながら、心理的にも安心安全な空間をつくっていくこともこの提案から、繋がっていきけるだろう。



『私とは何か——「個人」から「分人」へ』  
平野啓一郎  
「分人主義」



『心的外傷と回復』  
Judith Lewis Herman  
「回復の展開は三段階である。  
第一段階の中心課題は安全の確立である。」

Judith Lewis Herman, 中井久夫・阿部大樹訳  
『心的外傷と回復 (増補新版)』(みすず書房, 2023年) この本において、Herman は心的外傷からの回復を社会的接続するまでの回復としているが、回復の展開の第一段階として、まず心身の安心安全の確立が強調される。

平野啓一郎『私とは何か——「個人」から「分人」へ』(講談社現代新書, 2012年) ここで主張される「分人主義」において、「分人」は人は分けられない個人が一人存在するのではなく、対人関係ごとや異なる状況において分化した異なる人格が存在し、それらすべてが本来の自分であると定義している。

『Little Nemo』Winsor McCay このコミックストリップは、主人公ニモの夢の中の冒険を新聞に連載したものであるが、必ずニモがベッドや自覚めたコマで終わる。

02. soaked HOUSE / びしょ濡れの家

type: リノベーション  
夫婦  
水しか愛せない夫婦のための家。

床や壁全てにを FRP の防水加工を施した。ベッドから降りると水に足が浸かったり、雨水が溜まる水盤があったり、立って入れるお風呂があったり、様々な状況で水を感じることが出来る作りである。それらは、川が廻るキッチン、洗濯スペースが象徴するように、生活には水が関わっていることを改めて思い起こさせる。濡らしてはいけない、水をこぼすといった概念のない家でもある。

soaked HOUSE/ びしょ濡れの家は、リノベーションで水しか愛せない夫婦のための設計で、これは、朝井リョウ小説の作品である、『正欲』（新潮社、2021 年）の作中に登場する人物である対物性恋愛の対象として、共に水を愛する夫婦をクライアントのモチーフとしている。修了制作の自身の作品においては、夫婦の性質だけでなく、作中の女性が言っている「地球に留学しているみたいな感覚なんだよね、私」といったセリフや、夫婦として生きていこうとするときに言った「生き延びるために、手を組みませんか」といった結託のセリフに設計態度を重ねている。リノベーションという行為は、金銭的な理由、家族としての記憶を残すため、建築物の歴史的価値を損なわずに住み続けるために選択される。この夫婦が社会生活において、何とか生きていくための手だてとして結婚・共同生活を選んだが、そういったリノベーションの「なんとか住む」と夫婦の「なんとか生きる」が呼応しあっているように思える。この家で行った設計行為も、別荘や小屋といった普段の生活拠点が別にあったうえである種ユートピア性の強いものではなく、コンセプトualでありながらも、ここに暮らしていくという考えのもと、生活の機能を担保しながら行ったものである。また、ヤマシタトモコ漫画である『違国日記』においての他者のさみしさや出来ないことなどを共感せずとも、違う人間として尊重し向き合ったり、理解が出来なくてもそれでも思いながら接していく登場人物たちの姿に、人間同士だけでなく生きにくさといったことに対して、様々な他者存在として、建築もそのようにあれなかないかと思いながら制作した。

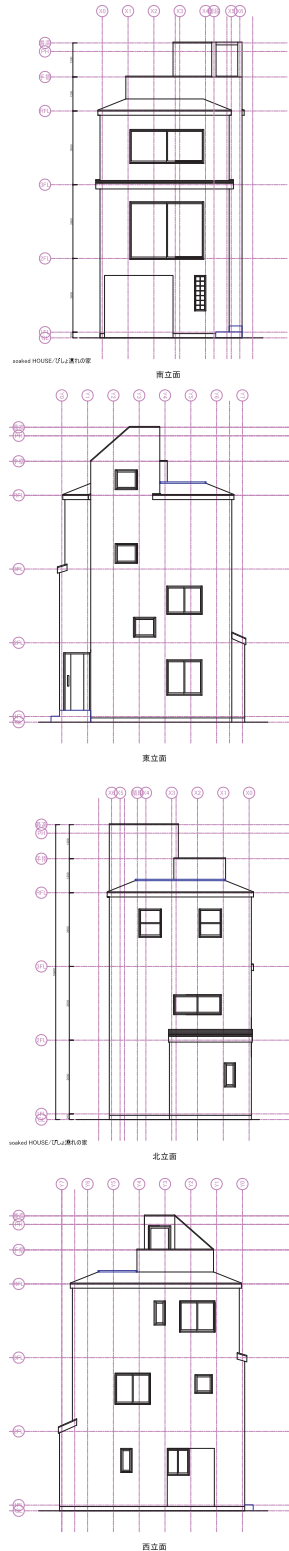


『違国日記』  
ヤマシタトモコ

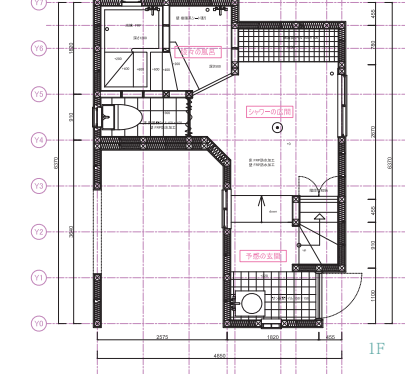


© ヤマシタトモコ/祥伝社フィールコミックス



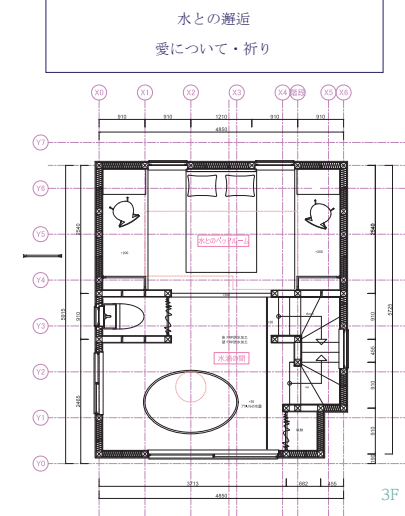


引力・物理学・ハビタブルゾーン  
打ち寄せる水、スコール、そして深い水

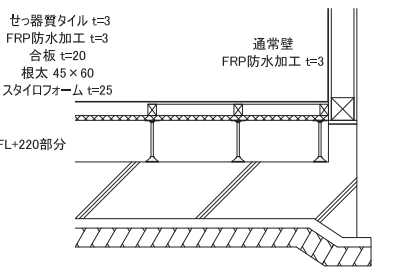


予感の玄関……服を脱ぎ捨て、水の打ち寄せるところへ下っていく  
シャワーの広間……天井からシャワーが降り注ぐ広間  
玄関部から 220 下がり、足が水に浸かる  
段々のお風呂……階段状になった先には、1200 まで水がくる深い浴槽

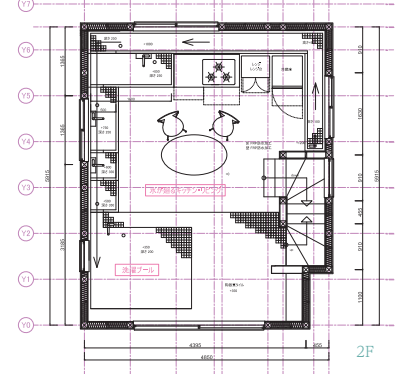
水との邂逅  
愛について・祈り



水とのベッドルーム……ウォーターベッドから降りると、水に足に浸かる。  
机などがある部分は +200 とし、最低限濡れない島を作った  
水滴の間……屋上のハッチを開けると、水がアクリルの水盤に落ちてくる  
いわば神棚のような神聖で、綺麗にしておく場所として作用している

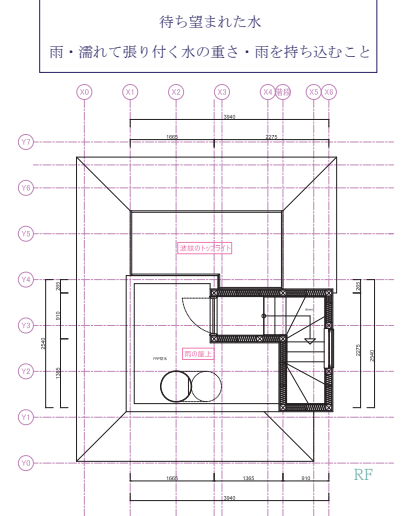


水のリズム・廻る水・留まる水  
川、ダム、河、生活

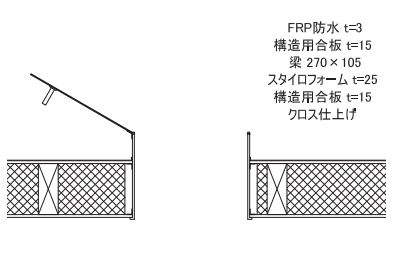


水が廻るキッチン・リビング  
洗濯プール……高い所から、途中、様々な大きさの水溜め場を通り、低い所へと流れていく  
中腹では、大きな量洗い場があり、最下層部には、足踏み洗濯できる大きな場がある

待ち望まれた水  
雨・濡れて張り付く水の重さ・雨を持ち込むこと



波紋のトップライト……既存の屋根の一部に母屋部分を利用し、緩やかな勾配の大きなトップライト制作する。  
雨の屋上……雨の日や嵐の日こそ濡れながら楽しく過ごすことができる  
3F に続くハッチを開けに行く



# 03. dancing HOUSE / 踊る家

type: 再設計 (RC 造)

夫婦 + 子ども (1人)

じっとしていられなかったり、奇声を発してしまう子を持つ家族のための家。

RC 造の躯体が 250mm、壁総厚 330mm、窓は二重サッシを用い、近所への騒音を気にせずに暮らせる設計とした。壁に設計した窓は FL から 1800mm で誤って外へ出てしまうことも防止している。また、屋根のトップライトを大きく取り、十分に光が入るようにした。

ふかふかした空間や、角をなくすことで怪我の心配も少なくした。子ども室は断熱材 (グラスウール) を仕上げとしても用いた空間であり、室内からの声は漏れにくい。子ども室と寝室部には伝声管が繋がり、騒がしから離れながらも、様子をうかがえる。また、伝声管を特に考えながら設計していった。スキップフロアにしたり、ダンスホールと呼んでいる子ども室の足元部や浴室を防音のすりガラスにすることにより、騒ぐ様子や影がまるで舞台を見ているような見え方をするように設計した。また、見守れる場所をシアターや名付けたり、各場所にダンスなどの動きやテンポ由来の名づけを行っている。

dancing HOUSE/踊る家では、『自閉症の僕が跳びはねる理由』(角川文庫、2016 年)の作中に書かれている、著者である自閉症当事者の東田直樹の言葉で、「僕が跳びはねている時、気持ちには空に向かっていきます。空に吸い込まれてしまいたい思いが、僕の心を揺さぶるのです。」という言葉を特に考えながら設計していった。当事者でないものから客観的に見た「飛び跳ねる」などという行為は、ただ、騒いでいたり叫んでいたり、特に、社会活動が行われる場においては、迷惑な行為にもうつってしまう。しかし、語られなかった当事者からの言葉が語られたとき、「飛び跳ねる」といった行為は、それは、自身の中に他者が感じえないような豊かな感性や世界が広がっていて、他者にその世界を想像させ、その人の世界へいざなってくれる。そのため、無理に既存の住宅に暮らすよりも、ケアといった概念や、近所への騒音問題など、ネガティブな理由からだけでなく、新築で、その人や家族の世界の象徴として住宅を新築として設計すべきだと考えた。また、設計していく中で実際問題として起きてくる、家族のケアを行っていく側の負担の軽減と、ケアされる側の世界の尊重を行うとともに、そういった立場をなくしていく場の在り方を様々な設計行為によって探っていった。それは、スキップフロアの作りや子ども室や浴室の作り、伝声管といった仕組みに現れていった。まるで騒いでいる様子がステップを踏んでいるように見えたり、見守るという行為が映画館のように鑑賞しているようであったり、つかまる所を設けて、一緒に楽しく踊ったり、声が変な所から聞こえる仕組みが家にあたりする。ここで、前述した自閉症当事者の著書や言葉とともに、ダンスやコレオグラフ (振付) の作品からも影響を受けた。William Forsythe の "Nowhere and Everywhere at the Same Time" という作品で、これは、何度か形を変えて行われているが、広い空間に振り子が沢山吊り下げられ、それを人々は避けて動いていくといった作品であるが、ここで人々は、まるでダンスを踊っているように動けてしまったり、鑑賞者からそのように見えてしまう。この作品は Forsythe が「コレオグラフィック・オブジェクト」と呼ぶ作品群のひとつとして発表しているものである。この試みは、私には振付そのものの枠組みを揺らし、問い直していくものとしても映った。こういった態度やみんなの見えてしまう、踊れてしまうということは、一種のやさしさであり、行為の枠組みや定義を揺らしていくことは、自身がこの修了制作において、設計行為として捉え直し、範囲を広げようとしていた空間に対する「名付け」といった行為や「模様替え」という行為の態度へも繋がってくる。

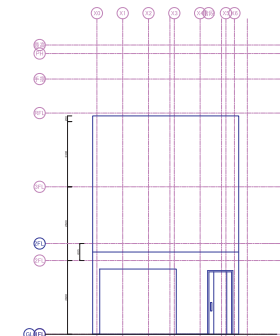


『NOWHERE AND EVERYWHERE AT THE SAME TIME, NO.2』  
記録映像内で観察される人々の動きのドローイング

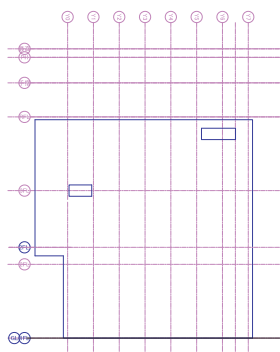


『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』  
東田直樹

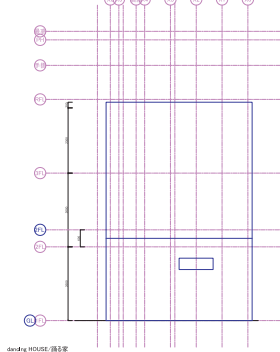
「僕が跳びはねている時、気持ちは空に向かっていきます。空に吸い込まれてしまいたい思いが、僕の心を揺さぶるのです。」



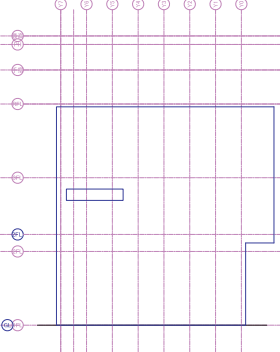
dancing HOUSE/踊る家  
南立面



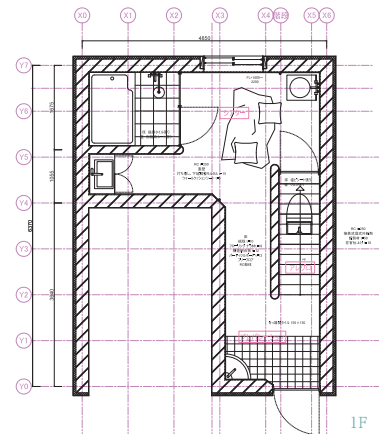
東立面



dancing HOUSE/踊る家  
北立面

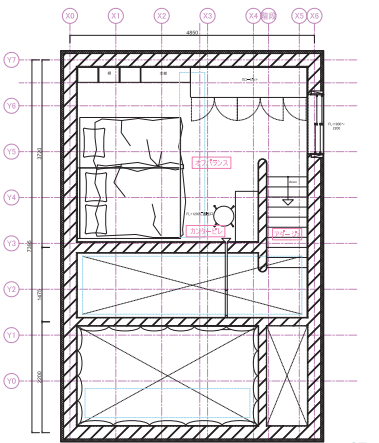


西立面



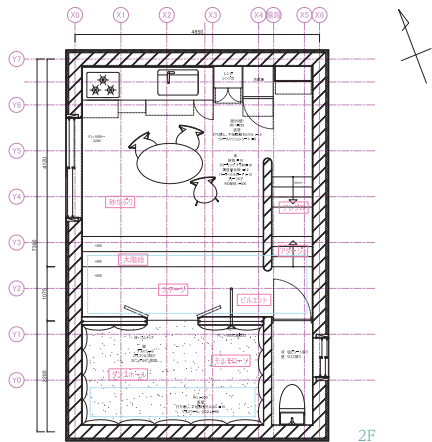
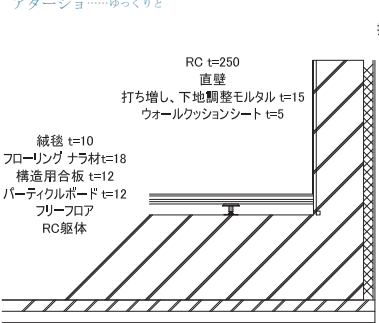
1F

ブレパレーション……準備。踊りなどで始めの動作  
玄関からの勢いそのままに FL と GL は同じ  
シアター……すりガラス越しに入浴の影が見える。安心して見守れる  
アレグロ……急速に。テンポの速い動き  
わくわくと階段を駆け上がる



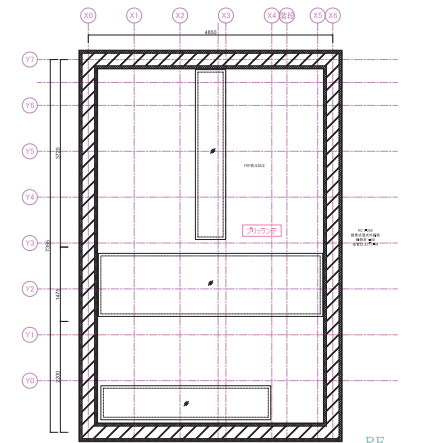
3F

オフバランス……からだの力を抜く動き。様々なダンスで用いられる。  
カンタービレ……歌うように。  
ダンスホール (子ども室) へと伝声管が繋がる。  
アダージョ……ゆっくりと



2F

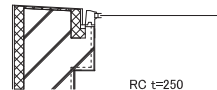
砂かぶり……スキップフロアの下は特等席  
ビルエント……開店する動き。  
伝声管はボールとなり、戻るする  
ダンスホール……子ども室は防音に優れ、床もゴムチップで怪我のしにくい作り  
足元のガラスから動きが見える  
モルモソロー……囁くように  
大階段……スキップフロアの階段はまるでステージの大階段  
ステージ……階下の人々は観客



RF

ブリッランテ……イタリア語で華やかに、輝かしくという意

RC t=250  
接着式湿式外断熱  
断熱材 t=50  
左官仕上げ t=10



RC t=250  
接着式湿式外断熱  
断熱材 t=50  
左官仕上げ t=10

絨毯 t=10  
フローリング ナラ材 t=18  
構造用合板 t=12  
パーティクルボード t=12  
フリーフロア  
RC躯体 t=200

